

【原 著】

保育施設における幼児の描画活動に見るキャラクター表現  
と図形模写能力の関連性

塩田（青陽）結 高橋 慧 片山 美香

The Relationship of Character Drawing and the Children's Shapes Copying Ability Observed in  
Drawing Activities Implemented at a Preschool Facility

SHIOTA (SEIYO) Yui, TAKAHASHI Kei, KATAYAMA Mika

2022

岡山大学教師教育開発センター紀要 第12号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education  
and Development, Okayama University, Vol.12, March 2022

## 保育施設における幼児の描画活動に見るキャラクター表現 と図形模写能力の関連性

塩田(青陽) 結※1    高橋 慧※2    片山 美香※3

本論は、幼児の描画活動におけるキャラクター表現と図形模写能力の関連性について考察する。そこで、キャラクター表現の有無が、図形模写能力に与える影響を明らかにするため、①キャラクター表現を行う幼児、②キャラクターは描かないが一般的な描画を行う幼児、③自発的に描画活動を行わない幼児、の3群に分け図形模写能力を比較検討した。その結果、キャラクター表現をする幼児も、一般的な描画をする幼児と同水準の図形模写能力を有していることが、明らかになった。このことから、キャラクター表現は、一般の描画表現と同様に、描画経験の蓄積となる表現形式の1つになり得ると考えられる。

キーワード：保育施設, 幼児, 描画活動, キャラクター表現, 図形模写能力

※1 基金拠出型医療法人隆典会片木脳神経外科内シグマ託児所

※2 ぐらしき作陽大学子ども教育学部

※3 岡山大学学術研究院教育学域

### I キャラクター表現と図形模写能力

#### 1 幼児の描画能力の低下

幼少児期における「模写」の教育的妥当性について、決定的な影響力を与えた文献の1つは、Lowenfeld (1947) の“Creative and Mental Growth” (『美術による人間形成』1963年)であったろう。世界的に著名な美術教育研究者であるLowenfeldの「このような型にはまった、固定的な繰り返しは、情緒的解放の一番程度の低いことを表している。この表現形式中にあらゆる種類の「模写」も入っている。これもまた型にはまった表現形式であり、そこでは、自己同一化は行われていない」や「模写ばかりしていると、子供は、最後には、自分の作品に自信を失い、明らかに逃避機制である型にはまった繰り返しの中に逃げ込むようになる」<sup>1)</sup> (強調文字と下線は、筆者による。以下、同様とする)等の著述は、既成のキャラクターを真似して描くことを含めて、その後の幼児造形教育及び美術教育関係者に、長年に渡って「模写」に対する否定的な見解と立場を取らせたことは、容易に想像できる。またLowenfeldは、「模写」と近接関係にある「与えられた輪郭」を持つ「塗り絵」に関しても否定的で、「子供の過半数は、一度ぬり絵が与えられると、創造性を失い、表現の独自性を忘れ、固定した物まね式のものになる」「ぬり絵とか練習帳についてみてきたようにこう

いう模倣的な学習方法は児童から、自分で考える力を奪い、つまり、描きたいものを自由に描けなくさせてしまう…」<sup>2)</sup>等の論述を残している。

保育施設における幼児の描画活動に関する問題として、いわゆる「絵が描けない（絵が下手、絵心がない）」等の描画表現に躓きやためらいを見せる幼児の在籍を挙げることができる。豊かな描画表現ができない要因には、描画に対する興味・関心・意欲の欠如と、描画能力の未発達と考えられる。保育施設では、設定保育で描画活動を取り入れた場合、その導入時には、描画意欲の喚起に重点が置かれることが多い。しかし、描画表現に消極性を見せる幼児が在籍する現状を考えると、現在の指導の在り方を見直すだけでなく、幼児の描画能力についても再吟味すべきであると言える。幼児は、描画主題（以下、主題と略す）を常に写實的に描く訳ではなく、発達年齢によっては、自分が描ける図形を組み合わせて描く。つまり、幼児が絵を描くためには、主題を構成する図形を描く、あるいは主題を図形の組み合わせとして抽象化し、それを紙の上に描き表すことが必要になる。このように、絵を描くに際して、どちらの場合も図形を描く必要があることから、幼児の描画能力と図形模写能力は関連性があることを指摘できる。この図形模写能力に対して、郷間ほか（2008）は、近年の幼児の図形模写を主とした描画能力が低下していることと、絵が描けない幼児がいることとの関連性を示唆している<sup>3)</sup>。幼児が絵を繰り返し描く場合、次第に複雑な主題を描き始める。そのような主題は、構成している図形そのものが複雑である、図形の組み合わせが多い等、より高度で正確な図形模写能力が求められる。つまり、幼児の描画能力の発達には、繰り返し描画ができる環境を設定することが重要であると考えられる。幼児の描画能力を発達させる繰り返しの描画は、人物、動物等の一般的な主題であることが想定されている。

本論で考察の対象とするキャラクター表現は、一般的な描画作品と比較し、保育者からの評価が低い傾向にある。しかし幼児が、繰り返し描く主題がキャラクターである場合でも、図形模写能力の発達を阻害するものでないことが明らかになれば、キャラクター表現は、一般的な描画活動と同様に、描画能力を身に付ける表現の1つとして、新たに価値を見出すことができる。本論では、幼児期におけるキャラクター表現の造形的価値を検討することを目的として、この表現を行うことと幼児の図形模写能力の発達との関連性を考察する。

## II 描画能力と図形模写能力の関連性

### 1 図形模写能力に関する調査研究の意義

キャラクター表現と描画能力の関連性を示すためには、郷間ほか（2008）が示唆した描画能力と図形模写能力に関連性があるということが前提となる<sup>4)</sup>。そこで、図形模写能力と描画能力に関する先行研究から2つの能力の関連性を検討する。

本来、図形模写能力の調査は、『新版K式発達検査』（1985）<sup>5)</sup>や『田中ビネー知能検査V』（2003）<sup>6)</sup>のように、知能発達を検査するための一項目である。しかし、久山（1983）は、幼児の人物描画と幾何図形模写の調査の結果、「人物描

画と図形模写との関連について見ると、全体的に言って、相互に結びつきがあることが明らかになった<sup>7)</sup>と述べており、幼児の描画について研究している奥(2003)は「模写能力は描画表現能力と重なっている」<sup>8)</sup>と言及している。さらに、原科・松村(2004)の研究では、健常児と知的障害児の人物描画能力と図形模写能力の発達を調査した結果、「幾何学図形模写検査で高い総合得点を獲得できる被験児は、「胴」のある人物画を描出」することが明らかになっている<sup>9)</sup>。以上のように、知能検査の一項目として捉えられてきた図形模写能力に関する調査研究が、人物画を中心とする描画能力との関連性を明らかにすることを目的として研究されるようになってきている。これらの研究から、図形模写能力と描画能力の関連性があることは、肯定的に捉えてよいだろう。

## 2 キャラクター表現と図形模写の類似性

幼児が、キャラクター描画をする場合、偶然組み合わせられた図形をキャラクターに見立てる段階と、キャラクターから図形を抽出して、その図形を組み合わせ、意図的に描く段階の2つに大きく分類できる。キャラクター表現では、前者の段階を経て、後者の段階に進む場合と、後者の段階からこの表現を始める幼児が存在するが、図形に関する能力を踏まえると、前者は主に図形の弁別能力、後者はそれに加えて図形模写能力が必要となると考えられる。特に、キャラクターを意図的に描く後者の段階において、図形に関する知識が乏しい年齢では、図形を意識せずに描いている場合もあるが、年齢が上がるにつれて、図形を意識しながら描く様子も見られる。



図1. 3歳3か月の女児Aの作品の一部

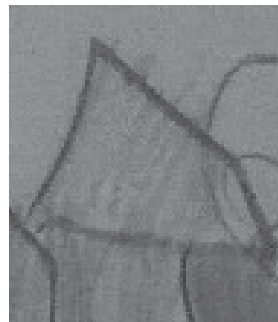


図2. 図1の拡大

図1は、3歳3か月の女児Aによる「アンパンマン」と「バイキンマン」のキャラクター画である。図2は、図1の作品の一部を拡大し、抜粋したものであるが、女児Aは、図2の部分を指しながら、「これ、さんかくよ」と話した。キャラクターを構成する部分ではないが、図形を描くことで絵を描き進められることに気付き始めている。キャラクター表現は、幼児が描きたいと思う主題から図形を抽出する作業が加わるため、模範となる図形を見ながら描き写す図形模写よりも複雑さが増している。また、図形模写は、正確に再現する必要があるが、原画を見ながらキャラクター描画をする幼児が少ないことから、キャ

ラクター表現と図形模写は、幼児の意識においても相違点があると考えられる。このように、両者には多少の差異があるが、キャラクターを描く過程を分析すると、この表現と図形模写能力の類似性を指摘できる。

### Ⅲ 幼児の図形模写能力の調査

#### 1 調査方法

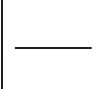

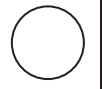

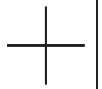
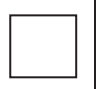
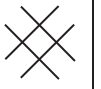

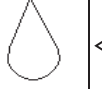
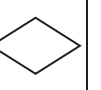
まず、先行研究で示されている描画能力と図形模写能力の関連性を前提に、一般的な描画、特に研究対象となっている人物表現とキャラクター表現の関連性、及びキャラクター表現と図形模写の類似性を吟味した。その結果、描画能力が高い幼児は、図形模写能力が高いという先行研究の知見に当てはめると、理論的には、キャラクター描画をする幼児は、一般的な描画をする幼児と同様に、図形模写能力が高いと仮定することができる。そこで次に、(i)キャラクター描画をする幼児、(ii)キャラクターを主題にはしないが、一般的な描画をする幼児、(iii)自発的に描画を行わない幼児、の3群に分けて図形模写能力を比較検討した。

①調査対象：異年齢保育を行う保育施設（以下、本園と表記する）に在籍する幼児の内、キャラクター描画をする幼児（以下、a群とする）4名、一般的な描画をする幼児（以下、b群とする）4名、自発的に描画を行わない幼児（以下、c群とする）6名の計14名を調査対象にした。調査対象児のそれぞれの年齢及び性別は、表3に示しており、2歳11か月～6歳7か月までの男児9名、女児5名を対象にした。また、調査を行った幼児は、全員、健常児である。

②調査期間：201X年9月15日～30日までの16日間、及び12月1日～15日までの15日間である。

③調査図形：調査図形は、『新版K式発達検査』で設定されている図形7個<sup>10)</sup>、及び筆者が設定した図形3個の計10個とする。具体的には、表1に示した横線、縦線、円、二重丸、十字形、正方形、二重ばつ印、三角形、雫形、菱形について調査する。その内、二重丸、二重ばつ印、雫型は、筆者が追加した図形である。

表1. 図形一覧

									
横線	縦線	円	二重丸	十字形	正方形	二重ばつ印	三角形	雫型	菱形

④調査条件：調査用紙は、図3のようにA4サイズの白色用紙を8等分して横向きで使用した。用紙の上部に手本となる図形をあらかじめ描いておき、その下に幼児が図形を模写できるように設定した。筆記具は、鉛筆、色鉛筆、水性サインペン、ボールペン等の中から、幼児が自由に選択できるようにする。

⑤手続き：調査は、幼児1名ずつ行う。調査をする時は、用紙を図4のように

折り，1つの図形を模写する時に他の図形が見えないようにする。また，「真似っこして描いてみて」「同じように描いて」等，それぞれの年齢の幼児が理解できる言葉で説明する。このような状況で，幼児が図形模写をする際の様子や発言等を記録すると共に，調査用紙を回収した。

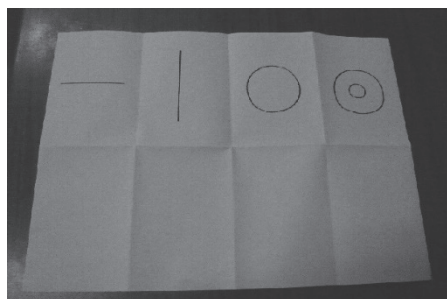


図3. 調査用紙

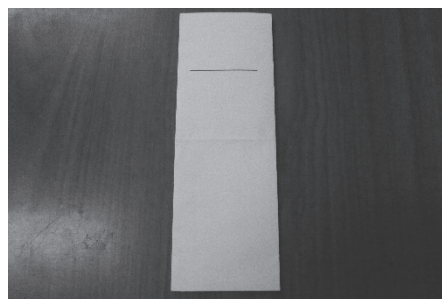


図4. 幼児に提示する際の調査用紙

⑥倫理的配慮：筆者は，本園に対して本研究への協力は任意であること，収集したデータは学術研究以外の目的で使用しないこと，を口頭で説明し同意を得た。さらに，園長を通じて保護者に対し，園児の氏名や園名が特定できない形で，学術論文のデータとして使用することの許可を得たので，倫理的配慮には全く問題はない。

## 2 調査図形の難易度

本論における図形模写の調査は、『新版K式発達検査』を参考にしている。この検査によると，幼児の図形模写の難易度は，横線，縦線，円，十字形，正方形，三角形，菱形の順に高くなる。これは，北村（2013）の研究等，他の先行研究においても同様である<sup>11)</sup>。しかし，各図形を描くことができる年齢を見ると，図形間の年齢幅が異なっている。『新版K式発達検査 2001 実施手引書』（2002）によると，各調査図形の75%通過率の年齢間隔は，横線・縦線間が約1か月，縦線・円間が約5か月，円・十字間が約9か月，十字・正方形間が9か月，正方形・三角形間が約12か月，三角形・菱形間が約19か月である<sup>12)</sup>。上記のように，各調査図形を通過する年齢の間隔は，難易度が高くなるにつれて，年齢間隔が広がっていることが確認できる。

しかし，模写可能な年齢を推測した上で，いくつかの図形を追加した場合，調査図形間の年齢間隔が狭くなり，より段階的な図形模写能力の発達を調査できる可能性がある。そこで，これまでの幼児の図形模写に関する研究を参考に，年齢間隔が広い正方形—三角形間，及び三角形—菱形間に該当すると推察される図形を筆者が選定した。

①二重丸の選定理由：二重丸は，Kellogg（1964）が分類したスクリブルの「複円周」に該当し<sup>13)</sup>，幼児の描画において，人物の目を表現する際等，出現する頻度が高く，洗練された図形である。二重丸と同様に，同じ中心を持ち，径の長さの異なる2つの同一図形によって構成される図形には，二重三角や二重四

角等も考えられる。しかし、幼児の描画に見られることは少ないことから、本調査においては、二重丸を選定した。

②二重ばつ印の選定理由：石岡（2003）の研究では、「×」の模写は4歳0か月から4歳5か月の年齢カテゴリーにおいて、88.9%が通過していることを明らかにしている<sup>14)</sup>。石岡（2003）の研究と『新版K式発達検査』における合否判定方法に違いが見られるため、単純に該当させることはできないが、目安として考えた場合、「×」の模写が可能な年齢は、十字—正方形間に該当する。そこで、「×」と類似しているが、より交点が多く、難易度が高いと推察される二重ばつ印を正方形—三角形間に追加した。

③零型の選定理由：田寺ほか（1962）が行った、幼児に対する図形模写能力の調査では、菱形が最も模写が困難であり、続いて三角形の困難度が高いという結論を出しており<sup>15)</sup>、『新版K式発達検査』と同様に、三角形—菱形間の難易度である図形がない。しかし田寺ほか（1962）は、調査した17図形の内、「V」が4番目、その逆の「^」が6番目、円形の僅かの部分を欠いた弧（ランドルト環）が8番目に模写の困難度が高いことを明らかにしている<sup>16)</sup>。また、図形の再生に困難度を増している図形の性質は、「鋭角或いは鈍角を含む図形が困難で、角の数が多い程困難である」「上下、左右の方向は、図形に影響していないように見える」「円形の僅かの部分を欠いた弧は、再生が困難である」等であることも示している<sup>17)</sup>。さらに黒田・田中（1992）は、幼児が模写に困難さを感じる図形の特性は、斜線であることを示唆している<sup>18)</sup>。これらのことから、三角形の辺の内、唯一、平行な線であった底辺が弧に変化した零型は、三角形よりも難易度が高い図形であると推察できる。そこで、三角形—菱形間に零型を追加した。つまり、本論における調査図形は、表1に示した横線、縦線、円、十字形、正方形、二重ばつ印、三角形、零型、菱形の順に、難易度が高くなると考えられる。

### 3 本調査における評価基準

本論では、『新版K式発達検査』を参考に調査を行ったが、独自に追加した図形もある。そのため、『新版K式発達検査』と、図形模写に関する先行研究である久保田（1965）、三塚（1994）、子安・郷式（2011）等の研究を参考に評価基準を検討した<sup>19)</sup>。これらの研究を、判定基準が厳密である順に並び替えると、『新版K式発達検査』（2002）、子安・郷式（2011）、久保田（1965）、三塚（1994）となる。このように、それぞれの研究によって評価基準に違いが見られるのは、研究目的や調査対象が異なることが要因であると考えられる。そこで、本論の目的に適した評価基準を検討する。

最も判定基準が厳密な『新版K式発達検査』は、幼児も対象に含んでいるが、角度まで設定されている図形もある<sup>20)</sup>。本論では、幼児の発達を検査する訳ではなく、描画能力に関連する図形模写能力を調査するため、より緩やかな判定基準が適していると考えられる。一方で、久保田（1965）、三塚（1994）は、判定基準が明確でない部分が多く<sup>21)</sup>、主観的に判定できるため、本論には適して

いない。そのため、客観的に判断できるが、緩やかな基準で判定している子安・郷式（2011）の菱形の模写評価基準の形式を参考に<sup>22)</sup>、本調査における評価基準を設定し、表2に示した。各図形によって、評価項目数及び評価段階が異なるが、これは、数値ではなく、それぞれの図形ごとに幼児の模写能力を比較・分析するためである。

表2. 本調査における評価基準

横線	①直線になっているか 1: ほぼ直線 0: 直線でない ②水平になっているか 1: ほぼ水平 0: 水平でない	二重ばつ印	①直線になっているか 1: ほぼ直線 0: 直線でない ②それぞれの線は斜線になっているか 2: ほぼ斜線 1: 一部, 斜線 0: 斜線でない ③交点は4つあるか 2: 4つある 1: 1つ不足あるいは多い 0: 2つ以上, 過不足がある ④それぞれの線の間隔は等間隔か 1: 一部, 等間隔 0: 等間隔でない
縦線	①直線になっているか 1: ほぼ直線 0: 直線でない ②垂直になっているか 1: ほぼ垂直 0: 垂直でない		
円	①半径の長さは一定か 1: ほぼ一定 0: 一定でない (楕円になっている) ②閉じた形になっているか 1: ほぼ閉じている 0: 閉じていない	三角形	①角の数は3つあるか 2: 3つある 1: 1つ不足あるいは多い 0: 2つ以上, 過不足がある ②辺の長さは, 一定か 2: ほぼ一定 1: 一部, 一定 0: 一定でない ③角度は, 一定か 2: ほぼ一定 1: 一部, 一定 0: 一定でない ④閉じた形になっているか 1: ほぼ閉じている 0: 閉じていない
二重丸	①交点がないか 1: 交点がない 0: 交点がある ②2つの円の中心は, 同じか 1: ほぼ同じ 0: 同じでない		
十字形	①直線になっているか 1: ほぼ直線 0: 直線でない ②2つの線が直交しているか 1: ほぼ直交している 0: 直交していない	乗型	①閉じた形になっているか 1: ほぼ閉じている 0: 閉じていない ②上部の尖形が描かれているか 2: ほぼ描かれている 1: 一部, 描かれている 0: 描かれていない ③下部が丸みのある形状になっているか 2: ほぼ描かれている 1: 一部, 描かれている 0: 描かれていない
正方形	①角の数は4つあるか 2: 4つある 1: 1つ不足あるいは多い 0: 2つ以上, 過不足がある ②辺の長さは一定か 2: ほぼ一定 1: 一部, 一定 0: 一定でない ③角は直角か 2: ほぼ直角 1: 一部, 直角 0: 直角でない ④閉じた形になっているか 1: ほぼ閉じている 0: 閉じていない	菱形	①直線になっているか 1: ほぼ直線 0: 直線でない ②角の大きさ 1: 大小が描き分けられている 0: 描き分けられていない ③閉じた形になっているか 1: ほぼ閉じている 0: 閉じていない

また、この評価基準は、幼児造形教育研究者1名、幼稚園・保育所における保育経験20年以上の実務家教員各1名の計3名の研究協力者と本論の筆者3名の計6名で、妥当性を吟味した。

#### IV 幼児の図形模写能力の調査結果

##### 1 図形模写能力の調査結果の整理

表2の基準に従って、幼児の図形模写能力を評価した。年齢の低い順に、結果を整理したものが表3である。評価は、本論の筆者3名で行い、3者の一致



率は、86.7%であった。評価が異なっている項目に関しては、協議の上、評価を決定した。

## 2 追加した各図形の難易度

本調査において、筆者は3つの図形を追加した。前述の仮定では、二重丸は円—十字形間、二重ばつ印は正方形—三角形間、雫型は三角形—菱形間であると考えていた。そこで調査結果から、この3つの図形模写の難易度を検討する。

### ①二重丸模写の難易度

男児Gは模写できないが、3歳6か月以上のその他の幼児は、模写できる。これは、円及び十字形においても同様である。そのため、円—十字形間に該当すると断定できないが、ほぼ同水準の模写能力を要すると考えられる。しかし、直線の組み合わせである十字形と、2つの円の組み合わせである二重丸の場合、十字形の方が、描線が安定している幼児が多い。また、男児Aの二重丸及び十字形の模写は、それぞれ図5・6である。二重丸は、2つの丸であることは捉えられているが、同じ中心を持っていることは捉えられておらず、模写図形自体の認識が不十分な段階であると考えられる。一方、十字形は横線が二重になっているが、2つの線が直交するという図形であるという認識されていると読み取れる。つまり、本調査では、円、二重丸、十字形の難易度は、同水準であると考えられるが、図形認識及び描きやすさという点においては、二重丸の方が十字形よりも難しいと推察される。

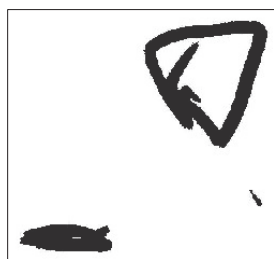


図5. 2歳11か月の男児A  
による二重丸模写



図6. 2歳11か月の男児A  
による十字形模写

### ②二重ばつ印模写の難易度

二重ばつ印の模写においては、3歳6か月以下と4歳3か月以上の幼児で違いが見られる。まず3歳6か月以下の幼児は、閉じた形である正方形は、正確な模写ではないが、図形の認識が進んでいる。一方、二重ばつ印では、直線を描いているが、数や角度等、正確性に欠ける幼児が多い。このことから、3歳6か月以下の幼児にとっては、二重ばつ印模写の方が難易度が高いと考えられる。一方、4歳3か月以降の幼児は全員、比較的簡易であると仮定していた正方形よりも正確に二重ばつ印の模写ができる。つまり、4歳3か月以上の幼児にとっては、二重ばつ印模写の難易度は、十字形・二重丸—正方形間であると考えられる。このような違いが生じる要因として、数の認識が影響していると

表 3. 幼児の図形模写に対する評価一覧

名前	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N
性別	男	女	女	男	女	女	男	男	女	男	男	男	男	男
年齢	2.11	3.0	3.0	3.6	3.6	4.3	4.4	4.4	4.4	4.8	4.11	5.1	6.0	6.7
群	c	c	a	b	b	c	c	a	a	b	c	b	c	a
横線 —	①	0	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	②	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
縦線 	①	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	②	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
円 ○	①	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1	1	1	0
	②	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
二重丸 ◎	①	1	0	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1
	②	0	0	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1
十字型 +	①	0	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	②	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
正方形 □	①	0	0	1	2	2	0	2	2	2	2	0	2	2
	②	0	0	0	0	0	0	2	2	2	2	1	2	2
	③	0	0	1	1	1	0	2	2	2	2	1	2	2
	④	0	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
二重ばつ印 X	①	0	0	0	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	②	0	0	0	1	0	2	2	2	2	2	2	2	2
	③	0	0	0	0	2	2	2	2	2	2	2	2	2
	④	0	0	0	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1
三角形 △	①	0	0	1	0	1	0	1	2	1	2	0	1	2
	②	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1	0	1	2
	③	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2	0	1	2
	④	0	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
雫型 ◊	①	0	0	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	②	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	1	2
	③	0	0	0	1	1	0	2	1	1	1	0	2	1
菱形 ◇	①	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1	0
	②	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
	③	0	0	0	1	0	1	1	1	1	1	0	1	1

注 1) 年齢は、簡略化して示している。例えば「2.11」は、2歳11か月を意味する。2) 群の a~c は、それぞれ「a: キャラクター描画をする幼児」「b: 一般的な描画をする幼児」「c: 描画活動を自発的に行わない幼児」を表している。3) 評価項目は、表 1 と対応している。

言える。閉じた形であれば、一筆書きが可能であるが、直線の組み合わせは、直線の数を把握した上で模写する必要がある。『新版K式発達検査』によると、4つの積木の数を数える課題における75%通過年齢は3歳6か月であるが<sup>23)</sup>、10個の積木から4つの積木を取り出す課題における75%通過年齢は、4歳6か月である<sup>24)</sup>。つまり、3歳6か月以前の幼児が二重ばつ印の正確な模写が難しい要因の1つには、4本の線を描出できないことが挙げられる。

### ③ 雫型模写の難易度

雫型模写は、評価項目②の「上部の尖形」が描き切れていない幼児が多い。雫型を正確に模写できていたのは、6歳7か月の男児Nのみであった。男児Nの結果を見ると、菱形以外の図形は正確に模写できていることを考えると、雫型が菱形よりも難易度が低いことが推察される。また、他の幼児も菱形より正確性が高いことから、同様のことが言える。三角形と比較すると、どちらの図形も正確には図形を模写できない幼児が多い。このことから、雫型の難易度は、三角形と同水準あるいは、前述の仮定の通り、三角形—菱形間に当てはまると考えられる。

## 3 幼児の描画経験による比較

年齢が上がるにつれて、模写できる図形が増加している点は、先行研究の結果と一致する。そこで、各群の幼児によって、調査結果に違いが見られるかどうか分析する。本来、調査対象児が同年齢であることが望ましいが、結果に大きく差が見られる2歳11か月～3歳6か月と、4歳4か月～5歳1か月に分けて検討する。

### (1) 2歳11か月～3歳6か月の幼児の図形模写































2歳11か月～3歳6か月の幼児が描いた5つの図形模写を抜粋したものが、表4である。まず、ほぼ同年齢であるa群の3歳の女児Cと、c群の2歳11か月の男児A、3歳の女児Bを比較すると、横線及び縦線はほぼ正確に描くことができる、円が楕円状である、雫型は描くことができない、の3点から、4つの図形模写に違いは見られなかった。このように、表3の評価結果を見ると大きな差は見られないが、表4に示した実際の模写を見ると、女児Cの正方形と三角形模写は角が表現されている。

一方で、男児Aや女児Bは、一度、筆を止めて別の方向に線を引くことができず、角が表現されていない。3名の幼児に年齢差がほとんどないことを考えると、図形模写能力の違いを生み出す要因の1つは、描画経験の差であると考えられる。3名の幼児全員、調査に対して意欲的に取り組んでいたが、男児Aは1つの図形を描き終わるたびに、「できた」と満足気に話していた。円や、図6の十字形のように図形を捉えられるため、調査方法については、理解していると考えられる。しかし、男児Aの発言から、模写図形と自分が描いた図形との違いには気付いていないと判断できる。

一方、キャラクター表現を行う女児Cは、発話は無かったが、正方形以降の

模写において、難しい表情で描き、模写の速度が遅くなっていたことから、幼児なりに考えながら取り組んでいたと考えられる。その結果、正確な模写ではないが、模写図形の違いを把握し、描き出そうとしている。

表4. 2歳11か月～3歳6か月の幼児の模写の一部

	男児A (2.11) c群	女児B (3.0) c群	女児C (3.0) a群	男児D (3.6) b群	女児E (3.6) b群
円 					
正方形 					
二重ばつ印 					
三角形 					
雫型 					

注1) a～c群は、それぞれ「a:キャラクター描画をする幼児」「b:一般的な描画をする幼児」「c:描画活動を自発的に行わない幼児」を表している。

次に、女児Cと男児Dや女児Eの模写を比較すると、女児Cより年上である3歳6か月の男児Dや女児Eの方が正確に模写できている。一方で、前述の通り、数の理解が難しいため、女児Cは正方形や三角形の角の数や、二重ばつ印の線の数が多く描かれているが、図形の形を捉えて描こうとしている点は、男児Dや女児Eと同様である。特に、三角形では、一筆で描こうとしている女児Cに対して、男児Dは頂点に短い縦線を描き加えることで、上部の角を表現しようとしている。この三角形の表現方法においては、女児Cの方が、正確性が高いと判断できる。

年齢が低いため、どの図形においても正確性は低く、評価基準に従って評価すると、結果に大きな差は認められない。しかし、図形模写における幼児の姿や描かれた図形を見ると、描画経験の多い幼児は、図形を描き表そうとする意欲が高く、より手本に近い図形を描いていると判断できる。また、その描画経験は、キャラクター表現によって蓄積されたものであっても、幼児の図形模写

能力の発達を阻害していないと言える。

（2）4歳3か月～6歳7か月の幼児の図形模写

次に、4歳3か月～6歳7か月の幼児の図形模写を考察してみよう。横線～十字形及び二重ばつ印は、ほとんどの幼児が正確に模写することができ、大きな違いは見られない。しかし、正方形及び三角形以降の図形については、描画経験によって結果に違いが見られる。その例として、それぞれの幼児の雫型模写を表5に示した。

表5. 幼児の雫型模写の一覧

女児F (4.3)	男児G (4.4)	男児H (4.4)	女児I (4.4)	男児J (4.8)	男児K (4.11)	男児L (5.1)	男児M (6.0)	男児N (6.7)
c群	c群	a群	a群	b群	c群	b群	c群	a群

注1) a～c群は、それぞれ「a:キャラクター描画をする幼児」「b:一般的な描画をする幼児」「c:描画活動を自発的に行わない幼児」を表している。

幼児の年齢幅が大きいことを前提に、年齢発達による雫型模写の違いを見ると、5歳1か月以上の幼児は、雫型の尖った部分から描き始めていることを確認できる。4歳児のように、先端から描かない場合は、左右対称にバランス良く描くことが難しい。図形を見て、どの部分から描き始めれば良いかを直感的に判断できている点が、年齢発達による模写の違いであると考えられる。

一方、描画経験の差によって結果を見ると、4歳11か月の男児Kや6歳の男児Mは、年下の4歳4か月の男児Hや女児Iと比較して、十分に図形を捉えられていないと判断できる。男児Gのように、描画活動をほとんどしない幼児であっても、描画経験が多い幼児と同水準の図形模写能力を有していることから、個人差があると言える。しかしこれは、男児Gが家庭において、幼児向けのドリルをしており、図形を描くことや筆記具を使用する機会が多いことが影響していると考えられる。つまり、この年齢の幼児の場合、描画経験のみが図形模写能力に影響を与えている訳ではないが、年上の幼児よりも正確に模写ができる幼児がいるということは、描画経験の差が要因の1つであると言える。

また、キャラクター表現をする幼児の模写結果を見ると、一般的な描画をする幼児とほとんど違いが見られない。同年齢の男児Hと女児Iの場合、よりキャラクター描画をする頻度が高いのが男児Hであるが、この幼児の方が図形模写における評価が高い。このことから、3歳6か月以下の幼児と同様、キャラクター表現は、図形模写能力に悪影響を及ぼすものではないと言える。

V 研究の総括と今後の課題

本調査の結果は、調査人数が少ないことや、幼児の年齢に幅があり、単純に比較をすることが困難であったこと等、図形模写能力の調査として課題も残るため、試論的考察の範囲を出ない。また、本論の調査における評価基準では、正確性に焦点を当てたため、4歳以下の幼児の場合、描けていないという評価であっても、その模写の程度には差が見られた。年齢が低い幼児の図形模写能力をより精密に評価するためには、基準を追加する必要もある。しかし、本論の調査において、キャラクター表現をする幼児は、一般的な描画をする幼児と同水準の図形模写能力であることが示唆された。これは、図形模写能力が描画能力との関連があるという先行研究の知見を考慮に入れると、キャラクター表現は、幼児の描画能力の発達を阻害する表現ではないと言える。

キャラクターを描き続ける期間がある幼児がいることから、描画発達が停滞してしまうことを不安視する保育者もいる。その理由は、どのような能力が育っているのか見えにくいことと、今後、キャラクターしか描かない又は描けないままになってしまうのでは、という不安を感じるためであろう。キャラクター表現が、必ずしも一般的な描画より優れた表現であるとは言えないが、図形模写能力という点においては、同程度の能力を伸ばす表現であると言える。そのため、キャラクター表現をする幼児に対して、否定的な印象を持つのではなく、一般的な描画と同様、表現形式の1つとして、まずは受容する姿勢が保育者には求められるだろう。

Gardner (1980) は、1900年代の前半から「外の世界からの干渉や**手本**を最小にすると、芸術の非常に貴重な中身が子どもの手からひとりであふれ出る」という考え方があり、「**模写**に強く反対している人びとや**模写**がほとんど何にもならないと感じている人びと」がいることを指摘している<sup>25)</sup>。一方で、「**模写**の重要性」を考察する研究も推進されて来たとして、「**手本**は、物事がどのようになされるかを示し、進むべき道を示唆し、問題解決と障害の克服への指針となりうる」と述べて、「模写」の肯定的な側面を論考している。また Gardner は、11歳の少年や少女が作り出した「芸術的なキャラクター」の事例等を考察し、キャラクター表現に対して、「はっきりした性格をもち、それを創造した人の想像力豊かな生活を映し出している」と肯定的な見解を述べている<sup>26)</sup>。

近年、アニメーションの人気の高まりによって、幼児が描画活動においてキャラクター表現をする傾向は、さらに高くなると予測される。未だキャラクター表現に関する研究は、それほど行われていない現状を考えると、これまで明らかにした造形的価値以外にも新たな価値を含んだ表現の可能性もある。一方で、キャラクター表現には、指導上の留意点がある等、一般的な描画以上に配慮が必要な部分がある。つまり、キャラクター表現について、造形的価値という肯定的な点だけでなく、幼児の発達上、留意又は配慮すべき点も含めて、さらに詳細な分析が必要であると考えられる。

註

1) Lowenfeld, V. (1957): *Creative and Mental Growth*, 3rd Edition. (pp. 50-

- 51). London, The Macmillan Company, Collier-Macmillan Limited. (竹内清・堀内敏・武井勝雄/訳: 『美術による人間形成』, 黎明書房, 86-87 頁, 1963 年.) 原著刊行 1947 年.
- 2) Lowenfeld, 前掲 1), p.18, 前掲 1) 訳書, 46 頁.
- 3) 郷間英世・大谷多加志・大久保純一郎「現代の子どもの描画発達の遅れについての検討」『教育実践総合センター研究紀要』, 17, 70 頁, 2008 年.
- 4) 郷間ほか, 前掲 3), 70 頁.
- 5) 生澤雅夫『新版 K 式発達検査法—発達検査の考え方と使い方—』, ナカニシヤ出版, 68-69 頁, 1985 年.
- 6) 一般財団法人田中教育研究所『田中ビネー知能検査 V』, 田中教育研究所, 2003 年. <http://www.maroon.dti.ne.jp/tier/test.html#test1> (検索日: 2020 年 8 月 27 日)
- 7) 久山まさこ「幼児の人物描画と幾何図形模写の関連について—その造形教育的考察—」『教育学研究年報』, 9, 11 頁, 1983 年.
- 8) 奥美佐子「幼児の描画における模倣の研究—模写能力から考える—」『名古屋柳城短期大学紀要』, 25, 57 頁, 2003 年.
- 9) 原科佳織・松村多美恵「人物描画能力と図形模写能力の発達とその関連性—健常児と知的障害児の比較—」『茨城大学教育学部紀要 (教育科学)』, 53, 298 頁, 2004 年.
- 10) 生澤, 前掲 5), 68-69 頁.
- 11) ①北村晋一『乳幼児の運動発達と支援 気になる動きと弱さへの指導—発達障害児も視野に』, 群青社, 264-269 頁, 2013 年. ②生澤, 前掲 3), 68-69 頁.
- 12) 生澤雅夫『新版 K 式発達検査 2001 実施手引書』, 京都国際社会福祉センター, 79 頁, 2002 年.
- 13) Kellogg, R. *Analyzing Children's Art*. Palo Alto, California, National Press Books, p.15, 1969. (深田尚彦/訳: 『児童画の発達過程』, 黎明書房, 19 頁, 1971 年.)
- 14) 石岡由紀「幼児における図形模写能力の発達」『九州ルーテル学院大学発達心理臨床センター年報』, 2, 53 頁, 2003 年.
- 15) 田寺篤雄・小畑佳子・二宮サチ子・南美子「幼児における簡単図形模写の発達」『樟蔭家政学』, 13, 89 頁, 1962 年.
- 16) 田寺ほか, 前掲 15), 89 頁.
- 17) 田寺ほか, 前掲 15), 88-89 頁.
- 18) 黒田佳代子・田中敏隆「幼児の図形模写に関する発達的研究—縦断的研究を中心にして—」『神戸女子大学紀要 (文学部篇)』, 25 (1), 222 頁, 1992 年.
- 19) ①生澤, 前掲 5), 68-69 頁. ②久保田正人「普通児と精薄児の図形模写能力」『教育心理学研究』, 13(1), 54-58 頁, 1965 年. ③三塚好文「健常児における書字能力と形態認知との関連について—精神遅滞児の書字能力を高めるための基礎的検討—」『特殊教育学研究』, 31(4), 37-43 頁, 1994 年. ④子安増生・郷式徹「文字・図形模写調査の結果」『“子どもに良い放送プロジェクト” 第 10

回調査報告書』, 日本放送協会, 77 頁, 2013 年.

[https://www.nhk.or.jp/bunken/research/category/bangumi\\_kodomo/pdf/report010\\_03.pdf](https://www.nhk.or.jp/bunken/research/category/bangumi_kodomo/pdf/report010_03.pdf) (検索日: 2020 年 9 月 25 日)

20) 生澤, 前掲 5), 70-101 頁.

21) ①久保田, 前掲 19), 54-58 頁. ②三塚, 前掲 19), 37-43 頁.

22) 子安・郷式, 前掲 19), 77 頁.

23) 生澤, 前掲 5), 80, 216-217 頁.

24) 生澤, 前掲 5), 80, 218 頁.

25) Gardner, H. (1980) : *Artful Scribbles: The Significance of Children's Drawings*. (pp. 169-174). New York, Basic Books Inc. (星三和子/訳: 『子どもの描画—なぐり描きから芸術まで』, 誠信書房, 210-216 頁, 1996 年.)

26) Gardner, 前掲 25), pp. 192-205, 前掲 25) 訳書, 238-252 頁.

---

The Relationship of Character Drawing and the Children's Shapes Copying Ability Observed in Drawing Activities Implemented at a Preschool Facility

SHIOTA(SEIYO)Yui \*1, TAKAHASHI Kei \*2, KATAYAMA Mika \*3

This study discusses the relationship between the act of drawing characters and the shapes copying ability of preschoolers observed in drawing activities. For the purpose of elucidating the effects of drawing characters on the children's shapes copying ability, preschoolers were divided into the following three groups and their shapes copying ability was comparatively examined: 1) those who draw characters, 2) those who do not draw characters but draw in a general way, 3) those who do not participate in drawing activities on their own initiative. As a result, it was elucidated that children who draw characters and children who draw in a general way both had the same level of shapes copying ability. Accordingly, as with the act of drawing in a general way, the act of drawing characters may be regarded as one of the expression forms for building drawing experience.

Keywords : preschool facility, preschoolers, drawing activities, drawing characters, shapes copying ability

\*1 Fund-contributed medical corporation Ryutenkai Katagi Neurosurgery Sigma Daycare Center

\*2 The Faculty of Childhood Education, Kurashiki Sakuyo University

\*3 Graduate School of Education, Okayama University

---